

川下の風景②

～人生は川の流れのように～

米津 達也

【老いては子に従え】

老いては子に従え、という

歳を重ねたら、何事も子の言う通りにしておくのが良い、という意味らしいが、それが良いのかどうか、あと30年程歳を重ねてみないと私には分からない。

逆に高齢福祉の現場で長く相談援助の仕事をしていると、老いても我が道を行き過ぎ、子の悩みの種を作る高齢者は沢山見てきた。老いたる馬は道を忘れず、とも言うが、介護者である子の気持ちも分かるし、何事も経験豊かな高齢者の判断も尊重されるべきとも思うし、如何とも悩ましい。

ここ数年、高齢福祉分野においては「自立支援」や「自己決定」を盛んに謳うようになってきた。尊厳の保持やストレングスという視点以上に、少子高齢化、社会保障費逼迫の2025年に向けて、どちらかと言えば「自己責任」を匂わせる雰囲気がある。介護保険制度は、2000年にスタート、措置から契約へ、多様なサービスをニーズに合わせて選べる、というメリットを打ち出し、今年で21年目を迎える。行政や社会福祉法人だけでなく、民間企業にも広く門戸を開放した結果、福祉業以外の異業種の参入が相次ぎ、創意工夫の中で期待通りの多様なサービスの展開が見られたが、一方で「福祉ビジネス」としてのモデルを確立するに至った。私も福祉ビジネスの世界で生きてきた人間なので、それが良いか悪いかはさておいて、ここにきて介護保険制度は広げ過ぎた大風呂敷を急速に畳む作業を始めている。社会保障という制度下で仕事をしていると、いつの間にか梯子を外された、ということは多々あるが、それは高齢者にとっても同じだろう。21年間、介護保険制度は介護が必要な高齢者や家族をサービス漬けにしておいて、ここにきて急速に「自立」や「決定」というフレーズで抑制しようとしている感覚は現場に立つ身として否めないと感じている。

「自立支援」や「自己決定」を蔑ろにしているわけではなく、十分な説明と権利・責任について語られることなく突き進むことに違和感がある。老いては子に従う、それは子が自らの意図を十分に汲み取り、子を信頼してこそ語られる親心だろう。

【凜として】

凜とした姿勢、というのが相応しい70代後半の女性に出会った。若い頃から華道の道を歩み、この年代では極みの境地に入ったと言っても過言ではない。複数の教室を持ち、たくさんのお教え子たちを抱え、「先生」と慕われている。

「すべては夫のおかげなのよ。私に好き勝手させてくれたから」と言って、仏壇の方を見ると、そこには亡き夫の写真と共に、如何にもこの方の生き方を示す生け花が、まさに凜として飾ってある。

華道の事などちっとも知らない素人が見ても、はっとさせられる、そんな花々の立ち姿である。

「さぞかしお高い花でしょうねえ」

「知りませんよ。お花屋さんが見繕って届けて頂きますから。まあ、お高いでしょうねえ」

そんな花の話に囲まれて、その仏間には家族の写真や華展の折の写真がたくさん掲げてある。

「それは立派な人でしたよ」と自慢げに亡き夫の事を語り、そっと仏壇に供えられたお菓子を、一緒に食べましょう、と差し出してくれる。

「もう召し上がったでしょうから」

そんな仕草や言葉の端々に、長年の夫婦関係を垣間見る。教育熱心だった夫のもとで育った子供たちは、高学歴で卒業し、都会でバリバリ仕事をしている。夫亡きあと、女性は独り暮らしとなり、静かに老いを享受しているように思える。以前に比べると予定を忘れることが多くなり、稽古の時間も集中力が途切れるようになり、台所も荒れるようになってきた。病気、加齢、活動力の低下、そして気力の落ち込み。多くの複合的要因が絡み合い、老いは誰にでも平等にやってくる。その過程は違ってても。

いよいよ独り暮らしに支障をきたしはじめ、介護サービス等を活用していきましようか、という話になった。都会から子供たちが駆け付けてくれた。折しも新型コロナウイルスの感染拡大に伴う緊急事態宣言下ではあったが、母に何かあれば次の瞬間には新幹線に乗ってやって来る頼もしい子供たちである。こういう子の対応や接し方を見ていると、親が子にどのように接してきたかが良く見える。少なくとも、この親子には深い愛情関係があり、その意味では凜とした姿勢は、凜とした母親像でもあった。

仏間での話し合いの折、当の本人は参加しなかった。

「お忙しいのに申し訳ないですねえ。お茶にしますか？珈琲を淹れましょうか？これは子供たちが買って来てくれたお土産なんですよ」といつもと変わらず仏壇に供えられたお菓子を差し出してくれる。きちんと夫に手を合わせてから。

今の生活の現状。その課題背景。今後の方向性について。自分自身のことなのに、彼女は一切立ち入らない。すべては子供たちに任せておきますから、と語るように。おそらく、ここに至るまでに親子でそのような会話があったのだろう。

【歩んだ道を想う】

老いたる馬が道を忘れず、歩んで来た道を終末期で想う家族もいる。

間質性肺炎を患い、在宅酸素を活用しても呼吸苦に苦しむ70代男性がいる。ベッドから立ち上がるだけでも苦しく、今はトイレに立つこともできず、食事をするだけでも苦しくて、食事の量が著しく低下し、飾られている写真の頃に比べると、とても痩せてしまっている。夫婦二人暮らし。子供たちもそれぞれ家庭を持ち、独立している。夫婦の仲の良さなのか、妻には弱音や愚痴も漏れる。夜中に苦しい、眠れない、と言っては妻の手を取り二人が寝不足に陥る日々。急速に病状が悪化しているというよりは、少しずつ病状は悪化し、身体機能を低下させている。入退院を繰り返すものの、昔のように簡単には長期療養入院が許されるわけもなく、また、ここにも新型コロナの影響が及んでいる。病状は徐々に悪化、積極的な治療は意味がない、延命治療を望むか否か。退院カンファレンスで突きつけられる家族にとって辛い現実の前で、「もう早く死にたい」「これ以上、家族に迷惑を掛けてどうする」と本人は泣き崩れ、妻もまた病苦に苛まれる夫の姿に口惜しさと悲しみを訴える。

「こんな病気になるとは思ってなかった」

「ずっと健康な人だったのに」

これまで歩んで来た誇り高き人生と、思い描いてきた老後の人生とのギャップに苦しむ。そして、子供たちもそんな親の姿を見つめている。

子供たちはどんな思いで見つめるのだろうか。心配、不安は当然だが、如何に自分たちの人生がこの親、この家族の下で育まれてきたのか、歩んで来た道を知る機会になっているのかも知れない。強い父親像が、今、強さだけでなく弱さも、情けなさも、悔しさも、様々な感情を抱える一人の存在として受け止められている。

2021.5.16 米津達也